

#書評



てんかんと精神症状の 交差点のロジックと深み

評者 音成秀一郎
広島大学病院脳神経内科



苦手な人もこれで安心！

4つのStepで考える てんかんの精神症状

兼本浩祐＝著

定価：3,850 円(本体 3,500 円＋税 10%)

A5・208 頁／医学書院／2025

[ISBN978-4-260-06176-6]

てんかんと精神障害——非専門医にとって、この組み合わせほど「コモン」でありながら、「自分が診るものではないランキング」の上位に入るものはない。多くの身体科の医師が避けてきた分野である。思うにこの絶妙な距離感は、学問側の責任でもあるだろう。てんかん発作の分類は複雑ですぐに改訂されるし、精神疾患の用語もややこしくユーザーフレンドリーとは言い難い。

しかし、当直前夜にどれだけ願ったとしても ER で遭遇するのが「発作」であり、対応に困るのが関連する精神症状である。もちろん精神科医に相談したくなるが、相談しても「それほど頼りにならなかった」と感じた経験もあるだろう。ただし、これは精神科医の力量の問題ではない。むしろわれわれ身体科の医師がてんかんに関連する精神症状への理解を十分にもたず、「丸投げ」してきた構造的な問題と捉えるべきである。

実際、「発作」の鑑別には精神障害も含まれ、さらに、てんかん患者の精神症状の背景には、薬剤の副作用や脳炎などの内因性の病態がかかわることもある。すなわち、精神症状のアセスメントには内科的アプローチが欠かせないのだ。最終的な治療を精神科に委ねるとしても、その質を最大限に引き出すには、身体科の並診という土台が欠かせないし、身体科による適切な前段階の内科的な視点をもつことが求められている。そしてそこにメスを入れたのが本書である。

とはいえ、多くの身体科の医師は精神科的なトレーニングを受けていない。そこで本書は、こうした“苦手意識”に正面から取り組んでいる。特に、精神症状の拾い上げから始まる4つのstepは、非専門医でも取り組めるアプローチだ。一見とっつきにくい精神症状も、実際には構造化されており、極めて「ロジック」であることを本書で実感できるだろう。どのように問診し、どの視点で考えるかといった“型”が自然に身につくのである。

ところで本書のタイトル『苦手な人でもこれで安心！4つのStep……』には少々驚いた。あの兼本浩祐先生が、手に取りやすさを優先したのかと。しかし、それは評者のハヤトチリで、やはり「兼本節」、そこは期待を裏切らない。本書の骨格となる4つのstepの輪郭を掴んでいく過程で、兼本先生の膨大な臨床経験とそれに資する底なしの知識によって裏づけられた考察に随所で触れることができる。症例の提示数は50を超え、文献の参照数も300を優に超え、まさに兼本先生にしか書けない唯一無二の本であった。一方で、症例としては各種の自己免疫性脳炎や、てんかん術後の難治てんかんの精神症状、各種薬剤での注意点、神経発達症に伴うてんかん、そして心因性非てんかん性発作(PNES)など、精神科医ではないわれわれを意識したラインナップで実にありがたい。生成AIによって知識へのアクセス性が大幅に向上した現在、表層的な知識を並べただけの医学書の価値は相対的に低迷し、アンチョコ本の賞味期限は短くなってきた。しかし、そのような「知識」に加えて、臨床現場での“思考的・経験的な視座”が加わることによって、これからの医学書に価値が与えられる。本書はまさにそのハイブリッド型の医書である。臨床医である読者が、著者である兼本先生と、本書の症例を通じて思考をぶつけあうような「知的ラリー」も楽しめる医学書の深みがある。レジェンドの臨床の追体験もできるのだから破格としか言いようがない。

これまで避けて通ってきた「てんかんと精神症状の交差点」、本書がその道筋を明確に示してくれるのは間違いない。自分は専門外と思ってきた方にこそ手に取ってほしい一冊である。もちろん読むかどうかは自由だが、読後に「読んでおけばよかった」と思っても、その時点で既に読んでいたので問題はないし、もっとも、副作用として「もっと早く読めばよかった」はあるかもしれないが、それは本書評のせいでもなければ読者自身のせいでもない。本書の良さのせいである。

G